2010（平成22）年９月１日
第112号
毎月発行
編　集
公民館だより編集室
発　行
西東京市公民館

西東京市 公民館だより

田無公民館
南町5-6-11
TEL 461－1170

柳沢公民館
柳沢1-15-1
TEL 464－8211

芝久保公民館
芝久保町5-4-48
TEL 461－9825

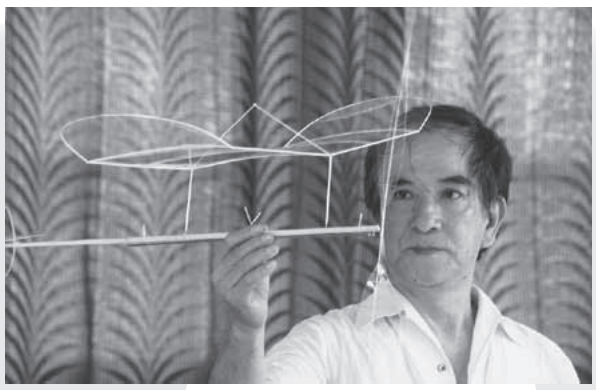
ひばりが丘公民館
ひばりが丘2-3-4
TEL 424－3011

谷戸公民館
谷戸町1-17-2
TEL 421－3855

保谷駅前公民館
東町3-14-30
TEL 421－1125

日本の航空100年と模型飛行機人生

飛行機とともに70年



日本で初めて動力飛行機が飛んだのはちょうど100年前のことです。今の代々木公園（当時は錬兵場）で、複葉機が滑走試験中に約60メートルの距離を飛行しました。

田無町在住の野中繁吉（のなかしげよし）さん（85歳・日本インドア・エアロ・クラブ会長）は、飛行機と空を愛し、模型飛行機の普及に大きな役割を果たしてきました。

韓国からの招待

今年7月に韓国模型飛行機連盟の招待を受け、野中さんは子どもたちの指導のために機中の人となりました。韓国で模型飛行機熱が大変に高まっていることを肌で感じた4日間でした。持参した九体の模型飛行機は全てプレゼントしてきました。今ごろ、異国の空を舞っていることでしょう。

模型飛行機との出会い

佐世保で育ち、軍機が飛ぶ姿を身近に見ながら少年時代を過ごしました。飛行機の音がするといつも飛んで行き、子どもながらに、いつかはこの飛行機に乗って、大空を飛んでみたいと思っていました。

戦時中は志願して航空隊に入隊。戦後、軍隊仲間にはパイロットの道に進んだ人もいましたが、野中さんはそうはしませんでした。

愛するのは「自分の意思で自由に飛び回れる空」でした。

野中さんと模型飛行機との出会いは1940年のこと。航空雑誌「空」のグラビアでドイツの室内飛行機を目にし、「蚊トンボみたいな機体に体が震えた」と、すぐに手近にある竹材などを使って製作を始めます。夢中になって模型飛行機を飛ばす日々。戦後も1945年10月には自作の模型飛行機を飛ばしていました。「これから本格的に飛行機をやるぞ」という思いでした。

1954年には第1回日本選手権大会が開かれ、野中さんは見事7位という成績でした。その後、世界選手権大会にも幾度となく参加し、模型飛行機に対する思いがますます強くなっていきました。

インドアプレーンの世界

野中さんを魅了した「蚊トンボみたいな」模型飛行機、正式には『インドアプレーン』といいます。その歴史は80年以上をさかのぼり、現在も滞空時間を競う国際大会が開かれるなど、世界中の愛好家によって日々進化を続けています。1984年には野中さんの尽力もあり、日本でも、名古屋市で世界選手権大会が開かれました。

インドア、つまり室内専用の競技用模型飛行機なのですが、その繊細さは想像を絶します。全幅約65センチに対し、動力となるゴムを除いた機体の重さは約1グラム。バルサを限界まで薄く削り骨組みとし、自宅の水槽で薬品を落として作ったマイクロフィルムを張っていきます。その薄さは0.4ミクロン（1万分の4ミリ）。人が横切る風圧でも壊れることがあるといいます。命となるゴムにも大変なこだわりがあり、はるばるゴムを海外から取り寄せています。そのほか、気の遠くなるような作業を、試行錯誤と知恵を集結させ、一ヶ月かけて一体を作り上げます。

そうして出来上がった自分の分身ともいえる機体が、左旋回しながらプロペラを動かし、ゆっくりと飛行する姿は、何にもかえがたい感動を与えてくれると野中さんはおっしゃいます。

野中さんのベストタイムは40分36秒。1978年、戦後33年目に、戦友への追悼の思いを込めた飛行での記録でした。

この街から大空へ

田無町に住んで58年になります。1970年には、全国から愛好家が集い、田無小学校の体育館をインドア・プレーンが舞いました。柳沢小学校で子どもたちに指導をしたこともあります。

野中さんはまた、人力飛行機にも強い関心を持っています。西東京市で人力飛行機を製作したい、と夢は尽きません。

サークル訪問

「着付けを学ぶ会」

～着物を日常の生活に～

「着付けを学ぶ会」は、「たんすに眠っている着物を活かして美しく着物を着たい」という熱意ある市民が集い、平成5年に下保谷図書館で活動が始まりました。その後、下保谷図書館が閉館になり、保谷駅前公民館開設以来活動の場を移して、月2回金曜日午前10時から12時まで、原田先生、熊倉先生を講師に迎えて、着付けを学んでいます。

初級中級は自分で着られるように、上級は他の人に着付けができるように学びます。

「立ちっぱなしなので、結構いい運動になってよく眠れます」と、代表の清水さん。

シンガポール出身の千葉さんは、結婚して来日後3年間着付けを学び、娘さんの七五三に着付けができる腕前です。

矢挽（やびき）さんは、お母様の着物を着たいと着付けを始め、サークルの会合、音楽会などにも着物で出かけます。もんぺ姿で自転車にも乗ります。

山ノ内さんは「こちらの会では月2回のゆったりペースで学ぶことができ、会費も経済的です。幅広い年代の方とお付き合いができ、先輩の話を聞いたり初歩的な質問も気軽にできます。他の教室と違い、同期生と競争意識を持つことなく自分のペースで学べます」と話します。

最古参の北原さんは、和裁もこなし、この日も自作の素敵な着物です。

堀岡さんは、娘さんを相手に練習に余念がありません。

洋服は、年齢を重ねると似合わなくなることもありますが、着物は一生着ることができます。さらに母から娘へ受け継ぐことができます。公式な場ではなくても、美術館に、音楽会に、食事に…自分の好きなように楽しんで着物を着る時代になりました。着物を着ることで、日本の伝統文化を育てていって欲しい、と講師陣。

みなさん、着物を着ることで、豊かで潤いのある暮らしを実現しています。

なお当日、他3人は所用のため欠席でしたが、みなさん一生懸命着付けに励んでいます。

市民文化祭では、こもれび小ホールで10月24日、帯結びの展示や実演などのショーで参加します。会員を募集しています！

連絡先☎代表　清水☎478・6083